

説教 『私たちの神、私たちの父』山本 護 牧師  
聖書 申命記 31:8 / ヨハネ福音書 20:15~17

信仰共同体を形成したのは男の弟子たち。これはキリストの身体(1コリント 12:27)の輪郭線である皮膚。とすれば復活は見えない骨髄。復活の周囲には柔軟な肉としての女たちがいた。ヨハネ福音書の「肉」はマグダラのマリア。他福音書では、墓で複数の女が天使に遭遇して怯えるが(マルコ 16:8, 路 24:5)、ヨハネ福音書のマリアは一人でも怖がることなく、ただただ泣いている姿が印象的だ(ヨハネ 20:11~13)。

悲しみのあまり恐ろしがっている場合ではないのか。マリアは復活したイエスに遭遇しても、それが誰かは分からない(20:14)。彼女はあくまでも死に拘泥しており、大好きなイエスが目の網膜に映っていても認識できないらしい。それが人間の感覚であり、観念であり、枠組みなのだろう。

マリアは呼びかけられる。「イエスが、[マリア]と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、[ラボニ]と言った。[先生]という意味である(20:16)」。かつてイエスが語った譬え話が、まさしくこの場に起こった。「羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す(10:3)」。

羊飼イエスからの呼びかけがあり、羊マリアは「その声を聞き分けて」応える。マリアという名には彼女の人生が刻印されている。苦しく辛い事、誇らしい事、喜びや怒りや悲しみのすべてが「マリア」という名に刻まれている。キリストは名(固有の実体)を呼び、彼女は呼ばれた全体でそれに応じる。いくら女たちの感覚が柔軟だとしても、信仰心という自力によって復活は実現しない。何よりもまず、キリストがその人を呼び出し、その人が応じる響き合いがあつてこそ死の壁は打ち破られる。

十字架の死から三日後、謎めいた表現で語られていたように(2:19~21)復活は起こった。死を打ち破ったイエスはマリアに言う。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。[わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る]と(20:17)」。

衝動的にすがりつくマリアの気持ちは自然だが、なぜそれが許されないのか。彼女が見たのは、自分を深く受容してくれたイエスであり、その大好きな地上のイエスに引き戻すごとくすがりついた。だがイエスはこれから、「父のもとへ上る」ところであった。では何のために、父のもとへ上るのか。

「わたしの父である神」が、「あなたがたの父、あなたがたの神」となるために、イエスは上られる。神が私たちの父となる時、人に「すがりつく」依存はありえない。私たちは自分の名を呼ばれ(20:16)、「ここに」呼び出され、自らの足で立ち、決断し、責任を負う者となる。もはや誰にも、何の偶像にも「すがりつく」ことはない。神が私たちの真の父であるゆえに、孤独だが清々しい。幾分厳しいが自由だ。私たちは孤独で自由な、独立した個であつてこそ、教会の、キリストの兄弟姉妹となりうる。

「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる(申命 31:8a)」。今日も、明日も、永遠に。マリアは泣いてばかりいたが、復活を前に私たちは恐れおののく。だが神は私たちの父となった。だから、先だつて導く父を信頼し、「恐れてはならない。おののいてはならない(31:8b)」。



《おまけのひとつ》

前例や見通しはない それでここまで進んできた 羊飼いが一人ひとりの名を呼んでくれたから 私たちの手柄は羊飼いの声を聞き分けたこと マリアのように 復活した羊飼いの声も聞き分ける